いのちの応援舎

おはよう21　2007年3月号より

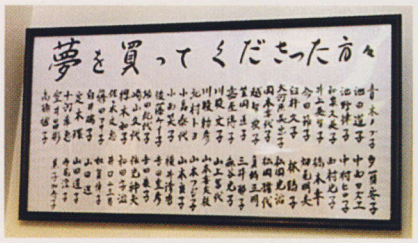
すべてのいのちが輝くために
――デイサービス、助産院、子育て支援の複合施設がオープン

「いのちの応援舎」全景。背後で山のようにそびえているのが屋島

NPO法人 いのちの応援舎

〒761-0101　香川県高松市春日町1176番地
TEL 087-843-8255　FAX 087-844-4135
開設●2006年2月
事業●デイサービス「ひなた」（定員15名、祝日を除く月～金9:00～16:00）、「ぽっこ助産院」（入院室5室＝出産～産後5日間利用可、妊婦健診や相談などマタニティサービスは月～土9:00～16:00）、病後児保育「もも」（定員6名、0歳～小学生対象、月～土8:30～17:00）、おやこ広場「ひなたぽっこ」（0～3歳までの子どもと親が対象、水・日を除く10:00～15:00の都合のよい時間に利用可）
職員●常勤11名＋非常勤9名（介護職4名、看護職5名、助産師5名、保育士2名、栄養士1名、調理員1名、事務員2名）

「ぽっこ助産院」の廊下に貼られていた写真。ここで出産した母子とその家族の笑顔がいっぱい



玄関脇には、開設資金を援助してくれた全国の仲間たちの名前を記した額が。今も支援者は増え続けているそうだ

午後のひととき、喫茶自慢のコーヒーと手作りアイスをいただきながら山本さんと語らう、森本幸子さんと大隅一恵さん。ともに東吉川市から

逆境からの出発

高松市の中心市街地から車で約10分。源平の古戦場として知られる屋島を北に臨む住宅地に、お年寄りのデイサービス、助産院、子育て支援という3本柱で事業を運営するユニークな複合福祉施設があります。

運営主体は、NPO法人「いのちの応援舎」。理事長の山本文子さん（62）と副理事長の真鍋由紀子さん（63）はともに助産師です。この2人を中心に、助産師と看護師の仲間たちが力を合わせて運営しています。

山本さんは、これまでに2000人以上の赤ちゃんを取り上げてきたベテラン助産師。病院勤務の傍ら、約20年前から休日には全国の中学校や高校をまわり、思春期の子どもたちに「いのちと性」について講演を行ってきました。

ところが7年前、その講演がきっかけで山本さんは逆境に立たされます。性について率直に語る様子がテレビ放映され、これを〝過激〟ととらえた一部の大人たちから職場へ嫌がらせの電話がかかるようになったのです。

「このままでは職場に迷惑がかかる」と悩んでいた山本さんのもとに、ある日届いた1枚のハガキ。そこには、「あなたはいのちの応援団だ」と書かれていました。この言葉に励まされ、講演活動に専念しようと決意した山本さんは病院を退

ウォッチング

人との出会いが財産。信頼できる仲間たちがいなかったら、この場所は生まれていなかった

——理事長・山本文子さん

デイサービス部門のリーダー、三井郁子さん(右)。お年寄りとコミュニケーションを図りつつ、大人数の施設ではできないていねいなケアを目指す

山本さんの夫・隆夫さん(左)は事務局長。「ジジ」「文子パパ」などと呼ばれ、みんなから慕われている

朝9時30分、デイサービスの利用者が次々と到着。出迎えたスタッフと手を握ったり抱き合ったり、にぎやかにあいさつ

職。マンションの一室を事務所にして、「いのちの応援舎」を立ち上げました。

しばらくすると、大手電機メーカーに勤めていた夫の隆夫さん(63)も「仕事を辞めたい」と言い出しました。56歳にして与えられた窓際の席に、居心地の悪さを感じていたからです。結局、隆夫さんも退職し、妻の活動を手伝うようになりました。

2人の夢と仲間たちの思いが形に

その後、ヘルパーの資格取得講座に通い始めた隆夫さん。実習に行くたびに「人を人として扱っていない。あんな施設には入りたくない」とこぼしていましたが、最後の実習先である大川老人訪問看護ステーション(香川県さぬき市)の阿部美知子さんの実践に、高齢者ケアの理想を見出します。

「あんな高齢者ケアを実践したい」という夫に共感した山本さんは、旧知の看護師仲間でもある阿部さんのもとへ相談に出向きました。その際、看護師仲間である真鍋さんとも再会。1年後に定年退職を控えていた真鍋さんから、「助産院を開きたい」という夢を聞かされます。

「それなら、両方の夢を合わせて、赤ちゃんからお年寄りまでをサポートする場所、昔の大家族のようにいろんな世代が集える場所を一緒に作ろう」と一気に夢がふくらみました。

ところが、なけなしの貯金や退職金をはたいても開設資金は足りず、銀行も担保に見合った額しか融資してくれません。そこで、「私たちの夢を買ってください」と、手分けして全国の仲間たち(看護師仲間や山本さんが講演先で知り合った人たちなど)に呼びかけたところ、2か月で約60名の人たちから1億数千万円を借り集めることができました。

こうして、たくさんの仲間たちの思いがつまった施設が誕生したのです。

お年寄りと子どもとが自然体で交流

「実際、イメージどおりの施設ができた!って思いますよ」と山本さん。大家族さながらに、お年寄りと子どもたちとの交流も日常的にあります。ただし、お年寄りが疲れるので四六時中べったりということはありません。

オカリナの演奏会やマジックショーなど、おやこ広場のイベントを一緒に楽しんだり、デイサービスの折り紙教室に子どもたちを招いたり。この日は午後から「ボランティアドッグ育成センター」(徳島県板野郡)の会員の皆さんとその愛犬の訪問があり、子どもたちともどもワンちゃんとのふれあいを楽しみました。

助産院で出産があったときには、助産師がお母さんの了承を得て、お年寄りに赤ちゃんをお披露目します。

「認知症で無表情のお年寄りが、子どもや赤ちゃんの顔を見ると自然に笑顔

「お母さんとはぐれちゃったの？」孫のような子どもを心配するデイサービスのお年寄りたち

受付で「おやこ広場」の参加申込みをする親子。登録には年間2000円が必要だが、初回体験は無料

週に5日は2Fの研修室を「おやこ広場」に開放。絵本やおもちゃ、ベビーベッドなどもあり、親子が気兼ねなく交流できる

日本地図を広げながら、講演先でのエピソードを面白おかしく語る山本さん。思わず身を乗り出すお年寄りも

ボランティアドッグの訪問は今回が2回目。お年寄りと子どもの双方に大好評

になったり、脳梗塞の後遺症で手の不自由なお年寄りが、赤ちゃんならば抱っこできたり。不思議なものです」とデイサービス部門のリーダー、三井郁子さん(63)。

もっとも、運営面では赤字こそ出ていないものの、余裕はありません。しかも、5年後には全国の仲間たちから借りたお金を返済するというのです。「だから私と真鍋さんは無給。私の講演料もすべて運営に回し、年金でつつましく生活しています。いざというときのために生命保険にも入ったのよ(笑)」と山本さん。

デイサービス「ひなた」の利用者数が1日4～7名と予想を下回ったため、「これからもう少し宣伝に力を入れたい」とのこと。ただし、少人数ならではのメリットもあります。「どんなことをしたいか、どんな所へ出かけたいか、できるだけお年寄りの声を聞いて希望を叶えるよう心がけています」と三井さん。

1日の大まかなパターンはあるものの、その日の柱となる活動はさまざま。ボランティアが来て銭太鼓を教えてくれたり、スタッフがリンパマッサージをしたり。月に一度は車で公園や博物館などに外出もします。パッチワーク、折り紙、工作など手仕事のプログラムも多彩。施設内で使うちょっとした備品にも、手作りの暖かさを心がけているそうです。

妊婦や若いお母さんたちもサポート

施設には、妊娠中の女性や子育て中の若い女性たちもたくさん訪れます。

この日、妊婦健診のために夫と長女とともに「ぽっこ助産院」を訪れた高橋妥子さん(31)は、妊娠8か月。「長女の出産のときは実家がある岩手に帰り、病院で出産しました。でも、家族と離れての出産はさびしかった。ここなら家族立ち会いで出産し、産後も一緒に寝泊まりできるので、今から楽しみ」と、ここでの出産を心待ちにしている様子でした。

「私たち助産師は、赤ちゃんの産み出ようとする力と、お母さんの産み出そうとする力を手助けするだけ」と話す真鍋さん。家族とともに自然なお産をすることで、大切な親子の絆を深めてほしい——これもまた、「いのちの応援舎」の願いの一つです。

施設の中には喫茶もあり、地域の人

今、赤ちゃんが産まれたよ！って産室からお年寄りのところまで報告に行く子どももいるんですよ——副理事長・真鍋由紀子さん

ヘルシーなデイサービスの昼食。本日は魚の甘酢あんかけ、きゅうりとささみの酢の物、ふかし芋、チンゲン菜と卵のスープ、いただきものとメロンと梨

「この部屋で赤ちゃんを産むんだよ」。妊婦健診に訪れた高橋妥子さんと夫の遵さん、長女の花万梨ちゃんに優しく話をする真鍋さん（右）

カレンダー作りを楽しむお年寄り。味気ないスケジュール表の代わりにカレンダーを自分たちで手作りし、そこにスケジュールを書き込んでもらうようにした

この日はおやこ広場の参加者が30名と超大入り！2Fに入りきらない親子が喫茶で昼食。いつもはデイサービスと同じランチも、この日はカレーに

を含め誰もが気軽に利用できます。とくに、おやこ広場「ひなたぼっこ」へ遊びに来るお母さんたちには好評とか。乳幼児を抱えるお母さんたちは、ふだんゆっくりとカフェでくつろいだり、外でランチを楽しむ余裕がありません。でもここでは、事前に予約さえしておけばランチも食べられ、昼食後に子どもを寝かしつけてゆったりとお茶を楽しむこともできるのです。

ボランティアドッグとのふれあいを楽しんだ後、子連れで友人と喫茶にお茶を飲みに来ていた森本幸子さんは、「子どもはまだ4か月なので目が離せませんが、ここはたくさんの目があるので安心。ランチもおいしいし、家では手の込んだ料理はできないのでありがたいです」と話してくれました。

〝いのちの応援団〟を増やしたい

施設の立ち上げが一段落した今、山本さんは再び講演活動にも力を入れつつあります。「福祉施設の立ち上げ時の話をしてほしい」と企業から要請されることもありますが、やはり中心は中学校や高校など思春期の子どもたちを対象とする講演です。また、「7年前くらいから親から子への虐待が増えてきた」と感じており、親たちへの講演にも力を入れています。

その内容は、助産師として、また看護師としていのちの誕生から死までを見つめてきた山本さんならではの熱いメッセージに満ちています。

「性という字は心が生きると書くでしょう。性教育はいやらしい話ではなく、心が生きる話、いのちの話」

「思春期になって親子の関係がうまくいかなくなった人もいるでしょう。でも、すべてのいのちは、望まれたからこそこの世に生まれてきたんです」

「愛すること、生きることを深く考えて今を大切に生きてほしい。困ったことがあったら電話をかけておいで」

そんな〝いのちと性〟の語り部を全国に育てようと、保健師・助産師・看護師・養護教諭を対象に毎年開催している「いのちの応援塾」も、すでに7回を数えました。参加者は春と秋の2回、2泊3日の合宿を通して楽しみ、交流しながら、いのちと性について学びます。「参加者の多くは、まずは自分自身が癒される体験をして帰っていきますよ」と山本さん。

すべてのいのちを応援し、輝かせたいと心から願う取り組みは、高松の地から全国へと広がっていくに違いありません。

（取材：種森ひかる／撮影：二宮清）

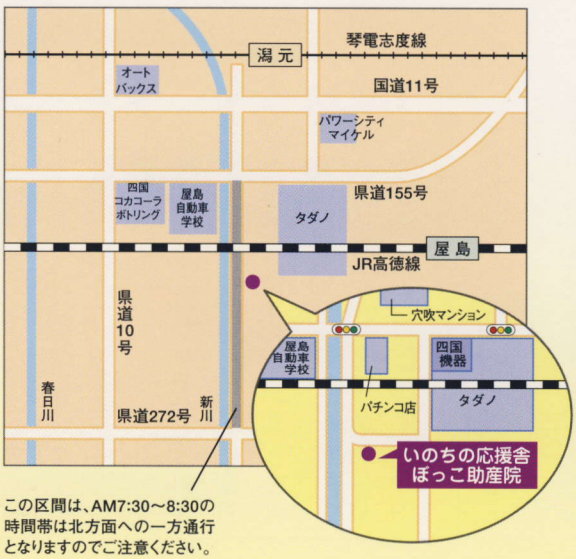
NPO法人 いのちの応援舎

ぼっこ助産院
直通TEL:087-844-4103

デイサービス「ひなた」

おやこ広場 「ひなたぼっこ」

病後児保育「もも」



この区間は、AM7:30～8:30の時間帯は北方面への一方通行となりますのでご注意ください。

〒761-0101
香川県高松市春日町1176番地

TEL 087-843-8255
FAX 087-844-4135

- 琴電志度線 潟元駅下車 徒歩約15分
- JR高松駅よりタクシーで約20分